

茶の湯文化学会会報 No.73

第73号 / 2012年 6月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

平成二十四年度大会見学会報告

桐浴 邦夫
船阪富美子

「北村美術館四君子苑」について

桐浴邦夫

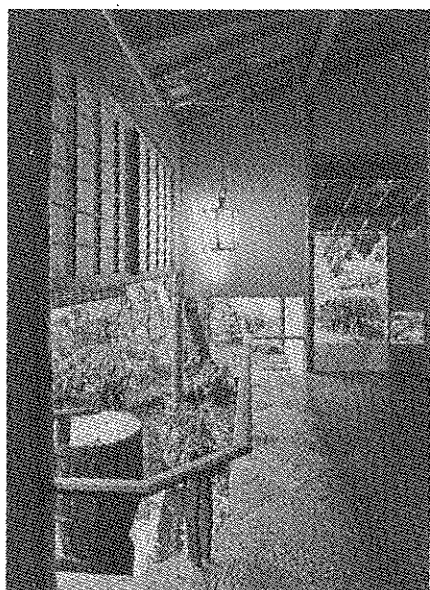
一雨ごとに緑が濃くなってまいりました。雨のそぼ降る六月一六日、四君子苑と山紫水明処において見学会が行われました。

四君子苑は、四君子と讃えられた菊の高貴、竹の剛直、梅の清冽、蘭の芳香から、北村謹次郎が命名したものです。菊、竹、梅（むめ）、蘭の頭の文字が「きたむら」と読めます。北村謹次郎は近代の数寄者で、林業を営むかたわら、茶人でもあって、美術工芸品の収集に励んでいました。そのコレクションは現在北村美術館に收藏されています。

洒落ついでネーミングされた四君子苑は、建築においても洒落つ気たつぷりの数寄屋建築です。昭和一九年に建物が竣工しますが、数寄屋大工は北村捨次郎。南禅寺近郊の野村碧雲荘を建てた棟梁です。謹次郎は同じ北村姓を名乗るこの工匠に持てる力を存分に發揮させた作品となっています。

当時米国では建築家マ・ライトがピッツバーグ郊外に、滝の上に建つ落水荘（一九三六）と呼ばれる建築を造り、一世を風靡していました。ライトは浮世

絵のコレクターで、滝の描かれた一枚を所持していたといひます。水と一如となった建築は、厳島神社のたとえを持ち出すまでもなく、日本建築の得意分野です。おそらく北村謹次郎は棟梁捨次郎と共に、米国風の少々猛々しい造形ではなく、穏やかな表情の数寄屋を造ろうとしたのだと思われまふ。茶室珍散蓮の内玄関は流れを採り入れ、広縁は池の上に張り出した形式です。そこでは孤篷庵忘筌に使われていた中敷居窓を採用するなど、大胆なデザインですが、伝統の意匠を応用し、柔和な形態として組み立てられています。



主屋は北村謹次郎が建築家吉田五十八に依頼して、戦後建て替えた部分です。和風意匠を基調としていますが、しかし従来の扱いではなく、いわゆるモダニズム建築として秀逸な作品となっています。天井までの高さの開口部にはめ込まれた荒組の障子、障子や床の間を組み込んだ洋室など、吉田ならではの意匠が随所に發揮された建築となっています。

雨は庭の風情をいっそう引き立てます。このたびは約一七〇名もの方々が見学に来ていただきました。足元の悪い中、お運びいただきありがとうございます。時間帯によっては多少滞りがあり、おわび申し上げます。スタッフの方々にはお骨折りをいただきました。そしてなによりも北村美術館の皆様には大変お世話になりました。末筆ながら御礼申し上げます。

「頼山陽書齋、山紫水明処」を訪れて

松阪富美子

二〇一二年六月十六日、見学会に参加して京都市上京区三本木、鴨川にかかる丸太町橋西の「山紫水明処」を訪れた。ここは儒者頼山陽（一七八〇〜一八三二）の書齋といふだけでなく、日本の代表的な煎茶室としても知られる。秋海棠や齒染の露地を通り、中門を

くぐると、まさに市中の山居の趣である。小雨に濡れた樹木の葉は、白玉のような雲を透した柔らかな光を受けて、まことに瑞々しい。飛石に導かれて庭を巡ると、いつのまにか書齋のすぐそばに来ていた。

かつては水西荘と称し、一四二坪の敷地に主屋を含めていくつかの建物があったようだが、現在は書齋と庭合わせて六十六坪が国定史跡として面影を伝える。

影山純夫先生のご解説と頂いた資料によれば、書齋は四畳半の主室と二畳の次の間に半坪の板の間から成り、鴨川沿いに縁側がある。主室の踏込床、縁の中国風欄干、ギヤマン障子のある東と南を含め四方を開け放つことができる開放性など、いずれも煎茶室の典型を示している。見所は多いが、中でも床脇は三段に分かれ、上は天袋、中は南天の外格子のある出窓、下半分を占めるのは網代戸の地窓である。ことと床板から続く地板の外の引戸を開ければ鮮やかな庭の緑、涼風に促されて振りかえれば鴨川の清流の向こうに東山三十六峰が一望でき、別天地を実感することとなる。

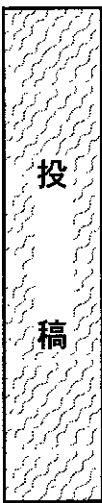
山陽は、この書齋でどのように過ごしたのだろうか。



素心の友、田能村竹田が「亦復一楽帖」の題語にその姿を描写している。「余、山陽の家

に寓すること数日「一八三〇年十二月下旬」、山陽一日早く起き、書室を掃除し、花を挿し香を焚き、呉春坡の山水幅を掛け、自ら鴨水を汲み、之れを古瓷甕に貯え、古端研を洗い、程氏の墨を摩り、佳筆紙を陳べ、並びに平日愛蔵して妄りに用いざる所の其の他の研屏筆架の諸具悉く称う。「中略」既に畢りて余を招きて曰く、今朝の供養結構「お膳立て」此くの如し。請う、吾が為に画かんことを」と。このようにして同帖に加えられた作品が、「白描の蘭竹」「没骨の牡丹」「草筆の水仙梅花」であった。これらの清々しい画は、竹田のみ功ではなく、知音山陽の慈愼と「山紫水明

処」という文人に理想的な環境があつてこそ成つたのだということをも、ここを訪れて改めて得心した。いつかこのような煎茶室で「随意に快談し、稍倦れば則ち茗「茶」を煮、酒を温む。或いは古法書名画を展観し「中略」閑を銷し興を遣るも、亦た復た一楽」（同帖第四図）というひと時を娛しんでみたいものである。

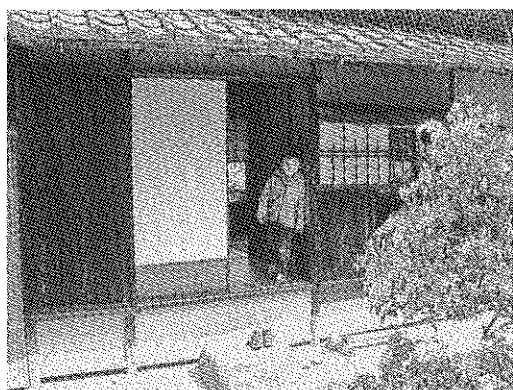


織田信長の名物茶器に視る

「本能寺茶会」の絡線

井上慶雷

天正十年三月、武田家を滅亡させた織田信長に残る敵は、東に北条家・上杉家。そして西の大名・毛利家を討ち果たせば四国・九州は時間の問題で、愈々、念願の「天下布武」の達成が目前となつていたのである。そこで同年五月十七日、毛利攻めの羽柴秀吉からの援軍要請の早馬で自らも出陣の決意をした信長は、五月廿九日、三十八点の「大名物茶器」と僅かな供廻りだけで急遽上洛して本能寺に入り、未曾有の事変に巻き込まれたのである。扱、そこでこの三十八点の「大名物茶器」



を巡つての解釈であるが……

◇翌六月初日、雨中の折から信長入京祝賀の名目で表敬訪問した公卿衆約四十名のために茶会を催したというのが定説であるが（桑田忠親氏等）、全くの誤りである。

（特に桑田氏は、『本能寺書院で安土から運んだ三十八種の名物茶器を披露する茶会が開かれた……正客は近衛前久で、筑前博多の豪商神谷宗湛・島井宗叱も招かれていたらしい……』というが、殿上人と地下人が同席すること自体、あり得ぬことであるし……また陰曆の六月初日はすでに盛夏であり、京の夏は蒸し暑く昼日中の茶会もあり得ぬことで、「朝茶会」でなければならぬのである。）またこの予期せぬ公卿衆は、別件の陳情のために勝手に押しかけて来たのであつて、『言経脚記』にも「進物はすべて返された」とあり、つまり当初は拝謁拒絶だったのである。

◇ではこの「本能寺茶会」とは何であつたのか……実は信長が、大名物茶入「檜柴肩衝」の所有者として、つとに有名な博多の豪商茶人・島井宗室と義弟・神谷宗湛を招いての「朝茶会」を催すのがその眼目であり……すでに遡つて同年正月廿八日にこ

の「朝茶会」を本能寺で催すことになって
いたが、「武田攻め」のためにか突如中止
になっていたのである。

◇その証左として信長の信任が厚い堺の代官・
松井有閑が、正月十九日付けで堺の茶人達
の塩屋宗悦、銭屋宗訥、天王寺屋宗及等に
宛てた書状に、《来る廿八日、上様、御上
洛なされ候、御茶の湯の御道具持たれ、京
都において、お茶の湯成され、博多の宗叱
（宗室）に見せさせられるべき由、昨十八
日仰せ出だされ候・・・》とあって、すな
わち上様が京都で廿八日に朝茶会を催され、
博多の島井宗室に名物を披露するので、お
前達もよかつたら連れだつて上洛するよう
に・・・と書かれていたのである。〔島井
文書〕

◇また吉田兼見も、その『兼見卿記』（天正
十年正月の条）で、

・廿六日、乙酉、京都所司代・村井貞勝訪
問。廿八日信長様御上洛との由。
・廿八日、丁亥、信長様の御上洛が延期さ
れたとの由。（と裏付けされているので
ある。）

◇そもそも大名物茶入の内、「初花肩衝」「新
田肩衝」「檜柴肩衝」の三器が天下の三大・

武將達に書状を発信していた・・・等と
いう不穏な絡線が散在していたのである。
◇要は秀吉であれ、誰であれ・・・島井宗室
との「本能寺茶会」を再度設えて、信長を
本能寺に誘き寄せればよいわけであり・・・
この年の正月に設え、かつ一旦反故にした
プランを再燃させたのである。そこで宗室
と昵懇の間柄である千宗易が奔走して、こ
の六月朔日の「本能寺茶会」が具現したの
である。

◇この事実は単なる推論では無く・・・事変
より十一年後の文禄二年、堺の茶人・宗魯
によって筆録された『仙茶集』に「島井宗
叱宛て長庵の道具目録」が収録されており、
その冒頭に「京ニテウセ候道具」とあり、
件の三十八点の茶道具が記載されているの
である。

- *作物茄子（九十九茄子）、*珠光茄子、
- *円坐肩衝、*勢高肩衝、*万歳大海、
- *紹臨白天目、*犬山灰被、*松本茶釜、
- *宗無茶釜、*高麗茶釜、*数の台二つ、
- *堆朱の籠の台、*趙昌筆の菓子絵、
- *古木の絵、*小玉潤の絵、*牧谿筆くは
いの絵、*牧谿ぬれ鳥の絵、*千鳥香炉、
- *二銘の茶杓、*珠徳作の浅茅茶杓、

大名物とされ、信長はすでに前二器を所有
しており、残る「檜柴肩衝」さえ掌中にす
れば、信長こそ天下に隠れもなき大茶人に
なり得るのである。

◇この信長垂涎的となる「檜柴肩衝」の入
手の機会を巡って・・・つまりこの六月朔
日の「朝茶会」が、信長を誘き寄せさせるた
め伏線として何者が企み、やはり紛れも
なく島井宗室を招く「朝茶会」として再燃
されていたのである。それでは一体、誰が
そのコーディネーターをしたのであろうか・・・
信長の三人の「御茶頭」の内、今井宗久、
津田宗及は折しも、堺見物の徳川家康の接
待でおおわらわであり・・・残るもう一人
の千宗易はというと、

◇五月廿八日、息子の小庵宛ての書状で（野
村美術館蔵）、《予定されていた殿様（信忠）
が、堺に御越しになられないというので、
私はじめ堺衆は力を失い、準備していた茶
会も無駄になり、返す返すも無念、残念至
極である・・・追伸。上様（信長）御上洛
との由、承つた。播州（秀吉）はいかが候や、
情報が判り次第、早々に連絡されたし・・・》
といひ残して以来、千宗易の名は確実な
史料に全く登場していないのである。しか

- *相良高麗火筋、同鉄筋、*開山五徳の蓋
置、*開山火屋香炉、*天王寺屋宗及旧蔵
の炭斗、*貨狄の舟花入、*蕪なし花入、
 - *玉泉和尚旧蔵の筒瓶青磁の花入、*切桶
の水指、*かへり花水指、*占切水指、
 - *柑子口の柄杓立、*天釜、*田口釜、
 - *宮王釜、*珠光茶釜、*天下一合子水翻
*立布袋香合、*藍香合。
- （事変後焼け跡から、「作物茄子」と「勢
高肩衝」の二点が拾い出されて現存してい
る。）

◇さて《初めに光秀の謀叛ありき・・・》と
いう歴史的固定観念に雁字搦めになつてい
る方々も、天正十年正月の『天王寺屋他會
記』に見られる光秀の「茶会記」をご覧頂
きたい・・・

- ・ 午正月朔日 安土城参賀の會記である
が・・・堺衆からも今井宗久・千宗易・
山上宗二・津田宗及他、錚々たる面々も
参賀しており・・・明智光秀・松井有閑が
「御幸の間」を一番に拝観し、しかも生鶴
を拝領する榮譽に浴している。
- ・ 正月七日 山上宗二・津田宗及を招いて
の光秀の朝茶会で、床には主君・信長の
「御自筆」を掛け、炉にはこれまた信長か

も備中高松で毛利軍と対峙している筈の秀
吉の消息を、何故にかくも知りたがるので
あるうか・・・さながら秀吉からの連絡を
待ち急いでいるように・・・そして未曾有
の事変が勃発・・・

◇そこでこの事象を実証史学に基づいて解明
して行くと、羽柴秀吉を主謀とした「本能
寺の変」の絡線が自ずと、垣間見えて来る
ものなのである・・・すなわち、

・ 前述の五月十七日・・・《毛利軍が五
万計の大軍で・・・》と早馬を送つて信
長の出陣を決意させたのであるが、この
時点ではまだ毛利軍は現れず、やっと廿
一廿一日頃着陣。
・ しかも秀吉は信長に出陣を請いなが
ら、すでに毛利軍とは独断で「五カ国割
譲の講和」の折衝をしており・・・これは
明らかに軍令違反条項である。

・ また《今後往来頼入候（愈々今後、往
来有るべく候）・・・これは秀吉が丹
地方の武將・夜久主計頭に宛てた文書
で・・・夜久氏の領地は山陽道から遠く
離れた中国山地にあり、秀吉は危険の多
い山陽道を離れた迂廻路を使つて、「信
長・光秀」の情報を受信したり、近畿の

ら拝領した有名な「八角釜」を懸けている
忠節振り。
・ さらに正月廿五日 11 件の島井宗室・津田
宗及を招いての朝茶会で、床には四方盆
に肩衝茶入を載せ、炉は使わず風炉を使つ
ているのであるが、これは會記にある《從
上様御拝領、始而》すなわち信長から拝
領した「平釜」を据えるためであつて、
どうやらその初披露の茶会だったのであ
り、光秀はこの平釜拝領の経緯を得意そ
うに話したことである・・・つまり信
長と光秀の間では「本能寺の変」を四カ
月後に控えながら、まだ不協和音など一
切聴こえて来なかつたのである。

◇以上、こんな小紙で「本能寺の変」の全貌
を論じるにはいささか無謀にも見えよう
が・・・この貴重な「本能寺茶会」の文献
をステップにして、ジクソーパズルの一片、
一片のピースを実証史学のスケーリングを
通して組み合わせて行くと、羽柴秀吉が関
わつた「本能寺の変」の絡線が、ありあり
と浮かび上がつて来るのである。

◇またこの『仙茶集』注解の松山吟松庵も、
全六篇の内、《第五篇の島井宗叱宛て長庵
の道具目録は、一片の文書に過ぎざる如く

なれども、史料として極めて重要な価値あるものなり……と力説している所以でもある。

理事 会

平成二十四年度第一回理事会在五月五日(土)池坊短期大学第二会議室で午後二時から行なわれた。会長の挨拶の後、谷端副会長の司会で議題に沿って議事が行なわれた。出席者は会長以下十四名、議題は①総会に提出する議案について、②その他の二件であった。①では平成二十三年度事業について、影山副会長より資料に沿って説明と報告があり、各例会についても担当理事より報告がなされた。決算報告については、谷端副会長より資料に沿って数字の読上げ、説明があった後、会計監査の二名によって監査済みであることが報告され、事業報告と決算報告が承認された。また平成二十四年度事業案について、総会・大会は六月十六日〜十七日の日程で開催することが決まっております、すでに案内状を発送済みである。国外での研究会について、八月二十五日〜二十九日の日程で中国で開催する案が中村副会長より提案され承認された。例年

研究会は国外と国内の二回開催していたが、国内の参加者が少ないこと、研究会を地方で開催して学会の知名度を上げる、という当初の目的も果たされたと考えてもよい時期ではないか、という意見もあり、国内研究会の中止が承認された。例会、会報、会誌については計画通り進めていることが各担当者より報告された。予算案については、谷端副会長より説明があり審議された。

例 会

②では「女性研究者による茶文化研究発表会論文募集」について、小泊理事より募集案の企画意図が資料に沿って説明された。日向理事より「依頼書評原稿についての内規案」について説明があった。創立二十周年記念会誌について、田中理事より、資料に沿って説明がなされた。

東京例会

(平成二十四年一月二十一日)

「茶の湯と昭和初期日本におけるデザイン運動」

細谷 誠

「茶の湯とデザイン」というテーマをめぐって、山脇道子という人物を軸に、茶の湯と昭和

和初期日本におけるデザイン運動の接点について紹介。近年、デザイン領域、とくに日本人デザイナーから茶の湯の世界への共感、デザインとの共通点について謳われることが目につく。例えば、昨年(二〇二一年)出版された岩波新書・原研哉『日本のデザイン』美意識がつくる未来』では、日本の美意識の象徴として「エンブティネス」を感じさせる茶の湯への関心が語られている。こうした「茶の湯とデザイン」をめぐる言説について注目してみると、日本のモダンデザイン史初期に浮かびあがるひとつのトピックが見えてくる。ドイツの造形芸術学校・パウハウスへの日本人留学生として、日本におけるヨーロッパモダンデザイン受容のキーパーソンの一ひとりであった山脇道子(一九一〇〜二〇〇〇年)の存在である。山脇道子が一九九五年に出版した『パウハウスと茶の湯』(新潮社)によると、茶人の両親・茶の湯中心の生活環境のもとで育ち、パウハウスのデザイン教育、モダンデザインに茶の湯との共通性を「シンブルかつ機能的であることを良しとし、材質の特性をできるだけそのまま生かそうとする姿勢」(同書四五頁)として見出し出していた。「茶の湯とデザイン」の接点の初期において既に今

日謳われる視点が現れていたと言える。発表では縁の地である築地や千駄木などの現況写真も紹介し、ビジュアルな追体験を試みた。

「豊臣秀吉の吉野の花見と吉野花見図屏風」

三宅秀和

豊臣秀吉を描く絵画は桃山時代に限っても少なからぬ作品が紹介されている。けれども秀吉の事蹟を基に描いてはいても、秀吉の関与を考え難いものが多い。そのなかで文禄三年(一五九四)に秀吉が催した吉野の花見を描く豊公吉野花見図屏風(細見美術館)は、現実に行われた催しと密な関係を想定できるとともに、秀吉の関与を検証すべき余地がある。

発表では、まず豊公吉野花見図の画面内容を押さえた後、吉野の花見がどのように行われたかを見、その効果や意味を検討した。吉野の花見は秀吉生母天瑞院の三回忌法要を行う高野山への途上で行われたが、関白秀次ら豊臣一族で高野山に向かわず、豊臣秀保の郡山城に向かった人々があり、吉野の花見の意味には秀吉の高野参詣と郡山城への秀次の御成と一体で考えるべき点と、別個に追求すべき点とがあった。前者で考えられることとしては宗教的色彩の濃い大和・紀伊地方の人心

を引きつける効果がある。後者としては政権の永続祈念と豊臣一族の結束強化と、秀頼誕生に動揺する関白秀次の地位の確認が考えられた。

吉野の花見は天下一統後の秀吉の絶頂期に政権の永続を祈念した催しであり、政権にとって絵面化するにふさわしい画題ということになる。豊公吉野花見図の画面を再び見ても政権の安泰を願う意図の一環で制作されたと考えられた。最後に豊公吉野花見図以降の吉野図を見、豊臣政権固有の意味が江戸時代に受け継がれなくなる過程も追った。

例会の「案内」

東京例会

七月十四日(土)(会場:東洋英和女学院)

大学大学院校舎 午後二時〜

「中世前期の茶の生産・流通・消費―儀式と法会を中心に―」

永井 晋氏

「筒形高麗茶碗の受容と和物茶碗」

砂澤祐子氏

九月八日(土)(会場:根津美術館)

午後二時〜

「茶の湯の南宋青磁」

西田宏子氏

「薩摩焼(飯)」 松村真希子氏

十一月十七日(土)(会場:未定)

午後二時〜

「天下一宗四郎について」

鈴木裕子氏

「中国の酥乳茶文化(飯)」

祁 玫氏

一月十九日(土)(会場:東洋英和女学院)

午後二時〜

「西洋人の見た茶の湯(飯)」

谷村玲子氏

「南蛮文化と茶の湯(飯)」

宇野千代子氏

七月二十九日(日)(会場:袋井市立中央)

午後一時三十分〜

「茶の湯の根源を探る」

松下 智氏

パネルディスカッション

「ふたたび、茶の湯とは」

松下周・吉野白雲・小泊重洋氏

八月四日(土)(会場:浜松市・ホテル)

午後一時三十分〜

「公家の茶の湯」

谷端昭夫氏

十一月下旬(会場:袋井市立中央・南公民館)

午後一時三十分〜

「文人たちと煎茶」

船阪富美子氏

「中世静岡の喫茶文化」

橋本素子氏

東海例会(会場:名古屋文化短期大学)

アセンブリホール 午後二時〜

九月二十九日(土)

〔未定〕

矢野 環氏

十一月二十四日(土)

〔紹鷄所持白天目の復元について〕(仮)

青山双男氏

近畿例会

十月六日(土) (会場：池坊短期大学)

第一会議室 午後二時～

〔抛入花と茶花と生花〕

井上 治氏

〔平重盛伝来の箱書をもつ 内金張茶碗

(射和文庫蔵) について〕

岩田澄子氏

十一月十七日(土) (会場：未定)

午後二時～

〔未定〕

未定

〔酒井宗雅の茶〕

影山純夫氏

北陸例会

九月十五日(土)

(会場：鯖江市「文化の館」
会議室(二) 午後二時～)

〔宮田小文法師と西行庵の再建〕

前田清彦氏

〔完成した禪陽溪庭園(鯖江藩主間部詮勝

公ゆかりの庭園)の茶亭〕見学

吉江勝郎氏

文化の館 鯖江市水落町二丁目二十五～二

十八 (電話〇七七八・五二一〇〇八九)

三月二十三日(土) (会場：未定)

内容未定

金沢例会

十一月二十五日(日) (会場：金沢市歌劇座

集会室 十時～十二時三十分)

〔未定(仙叟宗室と金沢について)〕

熊倉功夫氏

〔未定〕

未定

高知例会 (会場：高知県立文学館慶雲庵茶室

午前十時～)

七月一日(日)

〔茶の湯文化学会平成二十四年度大会

の研究発表をテーマとしたシンポジウム〕

発表者未定

軽食茶事

席主 柏井武氏

(十三時～十六時：会費千円)

九月九日(日)

〔山内家歴代藩主と奥方の略歴〕

森 一康氏

〔本能寺茶会〕

井上慶雪氏

十二月九日(日)

〔茶の湯関係文献を読み所感の発表〕

発表者未定

茶事

席主未定(十二時～十六時)

二月十日(日)

〔石州流三百ヶ条不白答(中)常用文〕

柏井 武氏

一般の方々茶の湯に親しんでもらうため
の茶席を設ける。

会 場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時 間 十時から十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

(会費三百円)



*新刊紹介

①『茶の湯と音楽』

「音楽」の世界をとおしてみえる茶の湯の美
意識について論述した書。

岡本文音著 思文閣出版

(定価七、八〇〇円+税)

②『和の佇まいを 中村昌生の茶室随想』

茶室・数奇屋建築の研究を背景に、日本建築
の伝統と茶の空間への熱い思いを綴る。

中村昌生著 宮帯出版社

(定価二、八〇〇円+税)

*年会費を未納の方は、同封しました払い込
み用紙にて至急お払い込みくださいますよう
よろしくお願いいたします。